

●誰もが死を自分事にするについて

◆19番（山下いづみ 議員） おはようございます。私は、さきに通告してあります誰もが死を自分事にするについてを質問いたします。

日本は超高齢社会です。本市においても、令和3年4月1日現在、65歳以上が7万516人で高齢化率28%、令和7年には29.2%と予想されています。このような超高齢社会の中、年を重ねていけばいくほど、楽しく最期を迎えるそのときまで幸せな日々を過ごせるような社会が望まれます。日本財団の人生の最期の迎え方に関する全国意識調査によると、死期が近づいてきたと分かったとき、人生の最期を迎えたい場所として、当事者は58.8%が自宅、次いで、33.9%が医療施設と回答しています。理由は、自分らしくいられる、住み慣れているからなどが挙げられています。一方、絶対に避けたい場所は、42.1%が子の家、34.4%が介護施設と回答しています。また、人生の最期をどこで迎えたいかを考える際に重視していることについて、当事者は95.1%が家族の負担にならないことである一方、子世代は85.7%が親が家族等と十分な時間を過ごせることと回答し、親子の考えにギャップがあります。誰もが迎える死を、押し迫ってから考えるのではなく、本人、家族、周りの人たちと元気なときに最期について希望や気になること、死生観について話すことは、お互いの生き方を尊重し、思いの相違を埋めるものだと考えます。

世界に目を向ければ、70か国以上で1万件以上の死を語り合えるデスカフェが開催されています。国内の中の例としては、いわき市が生と死の祭典や、いわきのいごきを伝えるウェブマガジン *i g o k u* など、明るく楽しく、そして無邪気に連携を模索し、地域の高齢者をポジティブに支えることを理念に事業を展開しています。本市においても、超高齢社会を通して、より豊かなまちになることを希望し、以下3点について質問いたします。

（1）昨年度から、がん共生セミナーが始まりましたが、目的、内容はどのようなものだったのでしょうか。今年度はどのような内容で行っていく予定でしょうか。

（2）高齢者を支える様々なサービスが行われていますが、本人が望む生き方を支える取組はどのようなことを行っているのでしょうか。

（3）高齢者も若者も、死生観や死について考えることや語り合える事業を進めてはどうでしょうか。

以上3点をお聞きし、1回目の質問といたします。

○議長（一条義浩 議員） 市長。

〔市長 小長井義正君 登壇〕

◎市長（小長井義正 君） 山下議員の御質問にお答えいたします。

初めに、誰もが死を自分事にするについてのうち、昨年度から始まったがん共生セミナーの目的、内容はどのようなものであったか、今年度はどのような内容で行っていく予定かについてであります。生涯のうち国民の2人に1人がかかると言われているがんは、医療の充実により生存率も高まり、社会復帰する方、病気を抱えながらも自分らしく生きる方が増えており、克服可能な病気となってきております。国は、がん患者を含めた国民が、がんを知り、がんの克服を目指すことを目標に第3期がん対策推進基本計画を策定し、これまでのがん予防、がん医療の充実に加え、がんになっても自分らしく生きることが出来る地域共生社会の実現を目指して、がんとの共生を柱として挙げております。

これを受けて、本市では、市民一人一人ががんについて正しく知り、がんと診断されても家庭や地域、職場で支え合い、相談や支援が受けられるがんと共生について理解を深めることを目的として、昨年度から、がん共生セミナーを開催しております。昨年度は、がん医療と緩和ケア、治療と口腔ケア、薬、食生活、治療と仕事の両立支援などをテーマに、がんに関する正しい情報や支援について学ぶほか、がん経験者であるピアサポーターの講話、地域での支援活動団体等の紹介、意見交換を4回の講座で実施いたしました。

地域での支援活動団体の中には、死生観について語り合える場を設置している団体があり、活動場所や内容等についての情報提供がありました。がん共生セミナーの運営につきましては、がん患者とその家族を支援し、がん制圧を目指す活動を行うリレー・フォー・ライフ静岡実行委員会と共催し、富士市医師会、静岡県社会保険労務士会富士支部など地域及び職域関係機関や団体の協力をいただきました。

新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、当初予定しておりました7月から10月に開催時期を延期いたしました。事業所関係者はじめ、一般市民など延べ73人に御参加いただきました。初めての取組でありましたが、受講者からは、新しい情報が入り有益だった、がん患者に寄り添う団体が多数あることが分かり参考になったなどの御感想をいただいております。本年度も昨年度と同様に、リレー・フォー・ライフ静岡実行委員会と共催で行いますが、支援活動団体の紹介を講座内容と関連づけるなどの工夫を凝らし、がんにかかったとしても社会復帰し、病気を抱えながらも自分らしく生きるための支援につなげたいと考えております。

次に、高齢者を支える様々なサービスが行われているが、本人が望む生き方を支える取組はどのようなことを行っているのかについてであります。本市では、元気なうちに人生の最期について考え、家族や大切な人と話し合うきっかけづくりとしていただくため、昨年12月に「終活心得～自分を生ききるためのエンディングノート～」を作成いたしました。これは、富士市在宅医療と介護の連携体制推進会議において、医師会や介護保険事業関係者等の委員の皆様からの御意見を集約し、市が発行したものであります。市民への周知につきましては、市ウェブサイトや地方紙、「広報ふじ」への掲載等を行い、市役所2階総合案内と4階高齢者支援課で5月末までに約1100冊を配布いたしました。また、高齢による身体的能力の低下などにより介護や支援が必要になった場合は、介護支援専門員や地域包括支援センターが高齢者の皆様一人一人の状況や希望を伺い、どのようなサービスを利用することが適切かを本人や家族と一緒に考えてケアプランを作成し、介護保険サービス等の利用につなげております。

これらのほか、成年後見支援センターや地域包括支援センターでは、認知症などにより判断能力が不十分なために財産の侵害を受けたり、人として尊厳が損なわれたりすることがないように、法律面や生活面で支援する成年後見制度の利用に関する相談、支援を行っております。

次に、高齢者も若者も死生観や死について考えることや、語り合える事業を進めてはどうかについてであります。本市といたしましては、現時点において死生観や死について直接考え、語り合うような事業は考えてはおりませんが、在宅医療と介護の連携を目的とし、高齢者やその家族を対象に開催する講座や講演会等の機会を捉え、エンディングノートの普及啓発を行ってまいります。また、がん共生セミナーにおきましても、緩和ケアをはじめ、がん相談支援センター及びがん患者サロン等の取組、死生観について語り合える場を設置している団体の活動などについて紹介をしておりますので、今後も継続するとと

もに、紹介できる団体を増やせるよう情報収集に努め、内容の充実を図ってまいります。

以上であります。

○議長（一条義浩 議員） 19 番山下議員。

◆19 番（山下いづみ 議員） 1 回目、回答いただきましたので、2 回目に進めさせていただきます。

まず、1 つ目、がん共生セミナーが昨年度から始まりまして、これはチームをつくって、いろいろ組み立てていたということで、この中で特にがんとの共生の在り方というのは、厚労省が出しているがんとの共生の在り方に関する検討会のものだと思うんですけども、ここでは緩和ケアということに重点を置かれているんですけども、緩和ケアの定義ですけども、自然の流れに死というものも沿う、早めたり遅めたりもしない、自分らしく生きていく、生活をしている中で、生活の質の向上、前向き、このようなことが定義されていますけれども、がん共生セミナーの中で行ったことの 1 つ、蒲原病院の緩和ケアのこと、そこに関連して活動団体の幸ハウスというところが死生観を語る、ここへつながってきますけれども、これらは最後の（3）にもつながってきますけれども、こういうところに重点を置くことは考えているのでしょうか。

○議長（一条義浩 議員） 保健部長。

◎保健部長（町田しげ美 君） がん共生セミナーの緩和ケアの講座の関係だと思うんですけども、昨年度も川村先生にお越しいただきまして、緩和ケアについて御講演いただきました。そちらについては「がん医療と診断時からの緩和ケア」というテーマでお話をいただいたところでございます。その中で、川村先生から幸ハウスの御紹介をしていただいたところでございます。幸ハウスについては、NPO 法人として活動をしていただいているところでございますけれども、こちらにつきましては緩和ケアというところでの御講演でありましたので、幸ハウスが、がん患者の方や家族が気軽に訪れ安心して話ができて、自分の力を取り戻せる場所というところで活動していらっしゃるということですので、御紹介いただいたところでございます。幸ハウスについては、今年度もがん共生セミナーの中でお越しいただきまして、団体の御紹介をいただくということで予定してございます。

以上でございます。

○議長（一条義浩 議員） 19 番山下議員。

◆19 番（山下いづみ 議員） 川村先生ですけれども、緩和ケアの講演を、がん共生セミナーで行ったときに、最後にこんな言葉を残していますよね。病気を治すことだけに特化することではなく、病気を治療しながらどう生きるか、自分の人生をどう終えるか、患者の生き方、死に方に目を向ける新しい医療が必要だと感じていると。そして、そこに関連してNPO 法人幸ハウスがありますけれども、皆様にお配りしてあります資料の A のところに、幸ハウスで開発しました、414 カードというものがあります。これはいろいろ試行錯誤して、正式には今年 5 月に完成したもののなんですけれども、既に 20 代から 70 代までの、500 人の方が体験されていて、これは個人での参加です。また既に病院、福祉施設、大学、多分これから富士市の看護専門学校でも授業の中で使われていくと思います。こういったことがあります。これに参加をするとどういったことがあるのか。

A の資料にも書いてありますけれども、死を見据えて今、大切にしていること、こういう思いがどんどん分かってくる。死生観を語るということは、暗いことではなくて、より自分を知ること、深めること、またそれは自分を知ること以上にまた大切な人の思いを知ること。こういうことから、豊かな人間関係を構築して、自分が大切にしているこ

とを最後まで大切にできる。こういったことをこれからのがん共生セミナーで取り扱っていただければいいですし、人生最期といったときに、苦しい、悲しい、寂しいということではなく、うれしい、楽しい、大切にされている、こんな思いができるツールだと思えますので、積極的に紹介、そして実行していただければと思います。

そして、このがん共生セミナーのところなんですけれども、厚労省のがんとの共生の在り方に関する検討会のところでは、緩和ケア以外に、がん患者の自殺対策というところがありますけれども、ここはがん共生セミナーでテーマとしてこれから入れていくということはあるのでしょうか。

○議長（一条義浩 議員） 保健部長。

◎保健部長（町田しげ美 君） がん共生セミナーにおけるがんの方の自殺予防対策ということになるかと思うんですけれども、こちらにつきましても、やはり緩和ケアについて御講話いただくところがございますし、また、がん相談支援センター及び患者サロン、また地域における支援活動団体の紹介もさせていただきます。また、市が行っておりますストレス相談やこころの健康講演会等の御紹介もさせていただきますし、また「ひとりで悩まないで」というようなリーフレットもつくっておりますので、それにつきましても、がん共生セミナーで配布させていただきたいと考えております。

以上でございます。

○議長（一条義浩 議員） 19番山下議員。

◆19番（山下いづみ 議員） がん患者の自殺というところではどういう方が多いのか。60歳以上の方、同居している方がいる方、生活保護を受けている方、実際にどこでといったところでは、自宅だというのが75%、病院でというのが4.2%。このところを見ますと、やはり何で追い込まれるのか、そして同居している方がいる、そうすると回りに迷惑をかけたくない、苦にするということですよ。ですので、今、いろんなところで情報提供、資料提供をしていくとおっしゃってましたので、こちらもどういったことができるのか、また考えて実行していただきたいと思います。お願いいたします。

そして次に、(2)の高齢者を支える様々なサービスが行われているが本人が望む生き方を支える取組はどのようなことを行っているのかについてですけれども、ここでは終活のエンディングノートを、いろんな専門家の方の声を聞いて作成されたと。私も見させていただきましたけれども、とても丁寧に作られていて、またカラーにもなっていますね。これはこれでとても見やすいし、いろんな意味で自分の持っているもの、これからのことを整理整頓ができて分かりやすいなと思いました。私の知り合いでもこれをつけている方がおります。どうしてエンディングノートをつけようと思って始めているのかと聞きましたら、とにかく家族に迷惑をかけたくない、困らないようにしておきたい。どちらかというと、これは自分の夢とか希望とか楽しいではなくて、周りの人に迷惑をかけたくないからという形になってくると思うんです。

そうしますと、これに関して、エンディングノートでは、これをきっかけに元気なうちから人生観、死生観について日常の中で会話していくことを目指しますとありますけれども、どういう展開でこのエンディングノートからこんな話ができるとお考えでしょうか。

○議長（一条義浩 議員） 保健部長。

◎保健部長（町田しげ美 君） エンディングノートにつきましては、その内容を御説明しますと、私のプロフィールですとか、私の歩み、医療介護について、最期の迎え方の希望、葬儀とお墓、財産のことについて、大切な人へのメッセージなどで構成されているも

のでございますけれども、こちらのエンディングノートを実際におつけいただきまして、それを基に、大切な御家族ですとか、大切な方と、自分はこういった考え方を持っているんだよというようなことを、ぜひ皆様で情報を共有していただいて、またその御本人、御家族にとってよりよい人生を送っていただくようなところで話合いのきっかけになればと思っております。

以上でございます。

○議長（一条義浩 議員） 19 番山下議員。

◆19 番（山下いづみ 議員） 今、部長がおっしゃられたこの思いというのは私も理解するんですけども、今回ここで挙げた死を語る、死生観を語るといったときに、えっ、そんなことを話すのか、そういうことは個人で違うんじゃないか、そういういろんな声もあるときに、本人がもともと迷惑をかけたくないから残しておこうということがきっかけですよね。そうすると、どちらかというところ、これは自分の考え、思いをまとめて引き出しの中にしまっておくようなもの。そしてまた、これは親世代で完結して終了するようなもの。これは全然否定しているわけではないんです、これはちゃんとなっているんですけども、ここで、ふだん元気なときに死生観、死を語るということがとても大事ではないのかというふうに考えるわけです。

そうすると、(3)に移ってきますけれども、例えば(2)のところ、介護支援、包括ケア、ここでは本人、家族の話を聞いてケアプランをつくる、うちの母も今ケアプランをつくっていただいていますから、話をするということは分かるんですけども、ふだん死生観、いろんなことを話をしていない中で、果たして本人が本当に望むことであるとか、家族が望むことが、よいサービスができるのだろうかということなんです。

それはケアプラン、今、介護保険サービスでも、家庭のこと、住居のこと、運動のこと、保険のことを考えると、サービスは何十種類とありますよね。その中で、今必要になりましたけれどもどういったことをお望みですかと言っても分からないのではないかと思います。そうしますと、やはりしっかりとここで発想を変えて、迷惑をかけるのは当たり前なんだから、前もってこういうことについて話をする、対話をするということがこれから大事になってくるのではないかと思います。

最初のところで、日本財団のアンケートでも、親子で考えの相違があるよ、実際に病院、介護現場、そういうところの方にお話を聞くと、結局親子で意見が違ったり、考えが違って、大変なときにいざこざが起きる、このようなことも聞いております。そうしますと、ふだんからの対話が必要になってくると考えます。

(3)のところ、挙げたように、高齢者も若者も死生観や死について考えることや語り合える事業がとても大事になってくると思います。そして、これは人それぞれですけども、死というのは、誰一人残さず平等に訪れます。そうしますと、これは市が主体で事業なり計画を立てて、その中でどんな団体がいるならば協力をしていただく、このような形を取っていくことがよいと思いますが、いかがでしょうか。

○議長（一条義浩 議員） 保健部長。

◎保健部長（町田しげ美 君） 先ほど市長答弁にもありましたとおり、現時点では市が直接、死生観、死について考え語り合うような事業は考えておりません。ただし、先ほどがん共生セミナーでも幸ハウスという団体の御紹介をさせていただくなど、死生観を語り合える場というところで、民間の団体がやられているようなところについてはがん共生セミナーの中でも御紹介いただくことになっておりますので、そういった形で、市が主催し

ている講座の中でそういった団体を御紹介していただくという考えでございます。

以上でございます。

○議長（一条義浩 議員） 19 番山下議員。

◆19 番（山下いづみ 議員） 昨年からはまったがん共生セミナーをしっかりと生かしていくということは聞きました。よろしく願います。

ちょっと世界のほうに目を向けてみます。例えばイギリス、オーストラリア、カナダ、いろんなところなんですけれども、コンパッションネート・コミュニティ、訳すと思いやりのコミュニティ、慈愛のコミュニティといったことが展開されています。これは、例えば老病死というところに関わってきたときに、専門家だけにくるのではなくて、お互いさまということで市民も関わっていく運動なんですけれども、そういうことをやっているところは公共衛生、市民の健康を扱うというところでは、政策の中心に死生や老い、グリーフといったものを中心に置いて展開されている。

それはなぜかという、全ての人の健康、生まれたときから亡くなるまで、それを公共で支えていく、サービスをやるということになれば、死生とか死を迎える老いということをしかりと政策の中心に置いておくという考えですけれども、今回、資料に静岡大学の竹之内裕文先生のやっている死生学カフェというのも添付してありますけれども、こういったことを静岡大学の竹之内先生にいろいろとレクチャーを受けました。確かにそうだな、今ここで介護支援とかがありますけれども、それは医療をどうする、終末期はどうすると、どんどんどんどん特化していく。そして、介護が必要になって、要支援になったときに、こんなサービスがあります、こんなサービスがありますと。今どういう状況が起きているんでしょう。必要だからたくさんのサービスが出てきています。これがたくさんつくられることはとてもありがたいことです。でも、人材が足りない、人が足りないと言っております。そして自分が本当に望むことは何なのかといったところは、それはちょっとカーテンをかけて、なかなか話す機会もないし、話したこともないし、どういうふうにしたらいいか分からないという状況になっています。

そして、エンディングノートのところで、人に迷惑をかけたくない、息子に迷惑をかけたくない、娘に迷惑をかけたくないから書いておくと。大きく元気に幸せになってねと生まれたのに、なぜ老いて最後のほうになったら周りに気を使って言いたいことも言えずに、お互いに話すこともないので親子で意見の相違が出てきたりということは、あまりにも悲しいのではないのかなと思います。

それを打破するには、しっかりと死生観、死というものについて対話していく。それは富士市なら富士市の公共政策の中にしっかりと死生観、死、老いというものを入れた中でやっていくことが、そういうまちをつかっていくことが必要だと思いますけれども、市長、どうしてお考えでしょうか。

○議長（一条義浩 議員） 市長。

◎市長（小長井義正 君） 先ほど部長からも答弁したわけですが、今回の提案、死生観について、やはり常日頃から考え、そしてその後の人生をどうやって生きるか、どういった死に方をしていくのか、そういうことを考えること自身が、幸せな人生を送ることにつながるだろうと、私自身もそのような認識でございます。

そういう取組については、市民活動団体であったり、医療機関もそうでしょう。また葬祭関係の事業者も恐らくそういった取組をされているんじゃないかなと思います。そういう中で、そういう方々への支援、連携ということは当然行政もやっていくべきじゃないか

などは思っております。

ただ、市が先頭に立ってやっていく場合に、どのような形で事業を進めていくのかといったことの難しさも実はあるんじゃないかと思えます。要は、生きる死ぬという部分になりますと、こういうことを言ってどうか、様々なお考えがあるかもしれませんが、宗教観につながっていく部分も現実にあるんじゃないでしょうか。そこら辺をどうやって整理をしていきながら、行政としてどういった事業を展開できるのか、これは今後検討をさせていただければなと思っております。

いずれにしても、そういうことの大切さを広げていくことは、今回のがん共生セミナーであったりとか、エンディングノートであったりだとか、そういうことによっても市民には伝えることはできるんじゃないかなと思っているところであります。よろしく願います。

○議長（一条義浩 議員） 19 番山下議員。

◆19 番（山下いづみ 議員） 自治体で言いますと、いわき市は、これは市の職員の考えから始まって展開していますけれども、死というものをタブー視せずに楽しく連携をしていこうというもので、とても人気があると。そして、ここを出しているマガジンとかも、最初は 1000 冊でしたけれども、やはり死を捉えるというところで反響があって、市外からも欲しいという要望があって、1000 冊のものが今 1 万冊刷っているなんていうことも聞いております。

そして、資料の C のところにありますけれども、いろぞら。ここは、2020 年 1 月から、沼津市の墓石をつくるどころ、富士市の葬儀屋、こういうところが連携して死をタブー視せず若い世代に面白おかしく伝えるということをやって、沼津市のお墓をつくっている人が、実際にいわき市の生と死の祭典、また向こうで行っている食い倒れとか、いろんな事業をたまたま見る機会があったときに、とても感銘して、確かにそうだ。自分はずっとお墓をつくっている仕事で、家族とかとずっと関わってきますよね。その中にいわき市のこの発想というのは本当に幸せを感じたということです。

こういう団体も既に富士市、沼津市にいますから、こういった団体とも協働もできますし、資料の B の静岡大学の竹之内先生は、2015 年からいろいろ試行錯誤して死生学カフェというものをやっている。大体 2 か月に 1 度、10 代から 80 代の人が集まって対話をする、生と死に対しての対話を学ぶということをやっている。今はコロナ禍の状況で直接会うということが難しく Zoom を使ってやると。Zoom を使ってやり始めたらどうなったのかというと、やはりこういうことを語りたい、知りたいということで、県外、海外からもこれに参加したいということで殺到しているそうです。

ですので、こういう静岡大学の死生学をしっかりとやっている先生が実践で行っていたり、幸ハウスが 414 カードを開発していたり、いろぞらが若い世代へ伝えていくということもやっておりますので、しっかりと連携していただきたいと思います。

ここで、実際にほかの自治体はもっとないのかなと探しましたら、滋賀県知事自らが最初に音頭を取って、死生懇話会というのをスタートしました。今年の 3 月 6 日です。なぜ知事がそんなことを始めたのかなということになりますけれども、死生について考える場をつくらうと思ったと。それは生と死、死と生を自分のものだけでなく、社会のものとしてできないか、死と向き合うこと、死生を考えることは幸せにつながるのではないか。それで、滋賀県は日本の真ん中なので、ここから発信、考えていきたいということが書いてありますけれども、本当にこれはすばらしいなと思いました。これは県庁の職員に

アンケートを取って、今ここでおっしゃったように、まだ死というのはもう少しプライベート的なことで話すことだとか、いや、それはお互いに理解することだから話したほうがいいのか、いろんな意見がある。

だけれども、日本は超高齢社会ですから多く死ぬ多死社会、こういう言葉も使われていますよね。そうすると、周りにたくさんの高齢者の方がいたときに、それはおのずと、死が今までよりも近いということになります。そうしますと、しっかりと自治体で、このことはどういうふうにできるのかということを考え、しっかりと政策に結びつけていくことがこれからは大事だと考えます。ですので、富士市はとても恵まれていると思います。

それは、もう既に大学の先生、民間団体でこういう考えを持って行動している方々がいます。そして、がん共生セミナーでもしっかり専門家の話も聞きますし、団体を呼んで話も聞きますし、そういうこともしっかりとやっています。ただ、これをちょっと連携してというよりも、実際にこれからちゃんとやっていかないと、これから介護保険サービスがどんどん増えてどうするんですかとか、医療ケアをすることにストレスがたまっていざこざがある、どうしますか。それには、世界でだんだん主流になってくるコンパッション・コミュニティ、慈愛、思いやりのコミュニティ、市民も専門家も協力をして、そしてそれは死生観を語ることから、お互いに分かることから始まっていく。

それが政策の中心にあるということを考えれば、富士市はこういうふうにもう既に土台として恵まれていると思いますので、いかにできるのかということ、市長を中心に話し合いをして、何か一歩進めていっていただきたいと思います。よろしいでしょうか。

今回、新型コロナウイルス感染症がありまして、急にあの人に会えなくなっちゃうとか、死を考える機会が今までよりもとても多いのではないかと思います。それを考えたときに何が浮かんでくるのか。怖い、どうしよう、どうしていいかわからないという不安だと思います。ですが、こういう死生観を語るということをやっていくとまた違う発想になっていきます。そして、より自分が何をしたいのか、周りの人が何をすればいいのかということが分かっていくと。

私も、この414カードというのを5回ぐらい参加したことがあります。私も最初、そんな自分にはそんな死生観ということもないし、どうしようなんて思いながら、とても興味があったので出ました。そうしたら、死を語っているのになぜこんなに温かな気持ちになって、生きる希望が湧いて、こうだったら自分の母親にこんなことができる、じゃ、母親に話してみようとか、何ですか、こんなに温まるような空気感。でも、今こういうことが大事じゃないですか。そういうところから、たくさんサービスから、この人に合うものを伝えることができる、サービスを使うことができる。そして、それに関わるケアをしている人、病院の先生、看護師もしっかりと安心にありがたく関わるることができるし、家族にとってもいい関係でつながっていけると思います。

ぜひ富士市でも一歩進んだ政策がこれからできていくことを希望しまして、一般質問を終わりにいたします。